



AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

オーガスト オフィシャル ハンドブック

2020 SPRING

あいミス ショートストーリー 芽吹きと回顧の帰省旅行 8

新アイリス登場! あいりすミスティリア! ~少女のつむぐ夢の秘跡~

べっかんこう×榊原拓 スタッフ対談

＊まえがき

Introduction

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何日目かの皆様、いつもご愛顧いただきありがとうございます。

オーガストも出展予定だった「コミックマーケット98」は、残念ですが新型コロナウイルスの影響で中止となりました。
当冊子も、コミケ会場での無料配布を予定していたのですが、急遽「通販でグッズをお買い上げいただいた方にオマケとして同梱」などの配布とした上で、pdfファイルでのデータ公開なども検討しています。
この機会に、多くの方にお楽しみいただければ幸いです。

さて『あいりすミステリア!』ですが、
先日は秋葉原のBAR「HONEST」さんとのコラボ企画が行われました。
多くの方のご来店があったとのこと、お楽しみいただけたなら何よりです。

また3月27日には、めざしさんによる『あいミス』4コマの単行本も発売されました。こちらも大人気の4コマがついに単行本化ということで、大変多くの方にお手にとっていただいております。
もしまだの方がいらっしゃいましたら、電子書籍版もございますので、ぜひお読みいただければと思います。

今後もゲーム本編はもとより、その周辺も合わせて『あいミス』がより盛り上げればと考えております。
引き続きどうぞよろしく願いたします。

それでは、多少のお時間を拝借いたしますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみください。

2020年5月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



▲ AUGUST

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2020 SPRING

- 3 あいりすミステリア! ショートストーリー
芽吹きと回顧の帰省旅行
- 8 好評配信中! 新アイリス「ナジャ」「アナスチガル」も登場
あいりすミステリア! ～少女のつむぐ夢の秘跡～
- 10 スタッフ対談
- 11 あとがき

あいらすミステイリア！ ショートストーリー 芽吹きと回顧の帰省旅行 8

ここ学食での昼休みは、コミュニケーションと息抜きのために大切な時間だ。

普段、学生たちははかましくらいにお喋りを楽しむのだが……いつもはその中心にいるヴァレリアが、今日は苦悶の声を上げている。

「うわああ……どうしよう、ホントどうしようお」

さすがに見過ごすこともできず、隣の席に腰を下ろした。

「どうした？ 腹でも痛いのか？」

「あ、センセー！ ……うん、そういうわけじゃなくて……」

ヴァレリアは一瞬トレードマークの八重歯を見せたが、すぐにまた眉間にしわを寄せた。

「俺でなければ相談にのるぞ。何があったんだ？」

「うん……ちょっと、これ……」

ヴァレリアが鞆を開いて、中から封筒を取り出す。

その特徴的な文字、そして差出人の名前に見覚えがあった。

「リステイ……おじいさんからの手紙か」

「そーそー。最初の方に書いてあったのは、センセーたちに迷惑かけてないかーとか、今度はいつ帰ってくるんだーとか、小言ばっかりだったんだけど……」

ヴァレリアは言葉を切ると、うるうると瞳を濡らして俺を見上げてきた。

「最後に、これ以上帰ってこないなら、無理やり家に連れ戻すって書いてあった……！ どうしよーっ！ マジでヤバイよー！」

「一度帰つたらいいじゃないか。授業はちゃんと受けてるんだし、きちんと成長したところを見てもらおう」

「そりや、宿題もちゃんとやってるし、授業もサボってないけど……」

言いつつ、ヴァレリアはふっと視線を逸らす。

「……でも、言葉遣いとか礼儀作法ができてないって、ゼツタイお説教される」

「あー……それは、なあ……」

ヴァレリアはれっきとしたヴァンピール貴族の末裔だ。

育ての親のリステイは厳格な生活を是としており、自由を重んじるヴァレリアとの相性はあまりよくない。

「おじいちゃんのは嫌いだ……わざわざ怒られたくないし。いつそのこと、この手紙も無視しちゃおうかなあ……」

「だめですよ、ヴァレリアさん。こがぞくはだいにじにしてー！」

学食内で給仕の手伝いをしていたファミが、頬を膨らませながら水をテーブルに置いた。

「こうしたいときに、おやはなしですよ」

「うっ、ファミが眩しすぎる……で、でも、ヴァンピールはめつちや長生きだから、ちよつとぐらい大丈夫だつて……ファミのおとうさんとおかあさんは、早くにしんじやいました。だから、もうあいたくてもあえないんです」

「あつ……」

思わずヴァレリアが口をつぐむ。

「おじいさんのこと、かんがえなおしてくれませんか？」

「いや、でも……」

「みんながえがおで仲よしなのが、いちばんですよね？」

「それは……そうかもだけど」

ファミの混じりつけなしの純粹な視線がヴァレリアに注がれる。

ヴァレリアはファミのキラキラとしたオーラから目を背けようとする。

しかしすぐに諦めたのが、ぐだーと机に突っ伏した。

「あーもうわかたつたよ。ちよつと考えてみる」

「ありがとございます！ みんな仲よしなのが、いちばんです！」

相変わらず、ニコニコと陽だまりのように微笑むファミ。この笑顔を見せられたら、誰もファミの願いを断れないだろう。

「でもなあ……やつぱおじいちゃんに怒られたくないし……」

「そんなに心配なら、誰かにマナーを教えてくれるように頼めばいいじゃないか」



「誰かって……誰に？」

「《アイリス》には貴族も王族もいるじゃないか。こういう時こそ、友達を頼ってみるといい」

「そっか……うん、そうだよーね！ ご飯食べ終わったら、早速頼んでみる！」

俺が助け船を出すと、一気にヴァレリアの表情が華やかだ。

「……おじいさんのために、礼儀作法を覚え直したい……か」

「そう！ クレアさんならその辺バッチリだと思うから、あたしのコーチになってほしいのっ！ おねがいおねがいおねがい……」

クリスが世界樹に祈りを捧げると同じくらいの熱心さで、ヴァレリアがクレアを拝み倒す。

昼休みの終わりがけに急に引き止められたクレアは、少し困惑気味の表情で目を伏せた。

「あ、もしかして忙しい？ 無理だったら断ってくれても全然オッケーだよ」

「あいや、忙しいはないし。きつと教えられれると思うよ」

言葉とは裏腹に、クレアの歯切れが悪い。
ヴァレリアも微妙な違和感に気づいたのか、小首をかしげる。

「あはは……いや、ヴァレリアは悪くないよ。ただ、ちょっと疑問に思ってるね」

クレアは困ったような笑みを浮かべながら、さらに言葉が続ける。

「ヴァレリアはおじいさんと仲が悪いと聞いてたからね。嫌いな人のために努力するのは、少々意外だったけどさ」

「確かにおじいちゃんとはよく喧嘩するし、話も合わないこと多いけど。でも嫌いじゃないよ」

「ああ、そうだったのか。喧嘩するほど仲がいい、つてやつかな?」

「そんな感じ? おじいちゃんにずっと育ててもらったしね。普段はめんどくさいな一つて思っことの方が多いけど」

「あはは、家族のしがらみが面倒なのはわかるよ。私も子供のは、似たようなものだったからね」

今のクレアは巨大な盾を自分の手足のように自在に操る戦士だが、元々は貴族の令嬢だ。

戦場でのクレアは勇猛果敢な一方、貴族としての振る舞いは忘れておらず、その流麗な振る舞いから女性ファンも多い。

きつと、ヴァレリアがクレアを頼ろうと思ったのも、洗練された所作を見ていたからに違いない。

「それで……クレアさんはあたしのお願ひ、聞いてくれるの?」

「もちろん。友人からの依頼なら、喜んで引き受けるよ」

「やったー! ありがとうクレアさん! これでお願いちゃんから怒られずに済むよ!」

両手を挙げてオーバー気味に喜びを表現するヴァレリア。クレアはにこやかにヴァレリアを見つめ、穏やかな空気が周りに流れる。

「そろそろ昼休みも終わってしまっし、練習は放課後にしようか。談話室集合でいいかな?」

「はいー! よろしくお願ひしますっ、クレアさん!」

ペコリとヴァレリアが頭を下げる。

こうして、ヴァレリアはクレア先生による特訓を受けることになった。

「ところで、どうしてヴァレリアは礼儀作法に息苦しさを覚えるのかな?」

「うーん、他にやりたいことが多いつてもあるし、あとは実家でめっちゃ怒られながら習ったから、なんかやだなーって」

放課後の談話室。予定通りに集まったクレアとヴァレリアの横で、俺もふむむと話を聞く。

今回俺は特に関わりはないが、クレアがどのような講義をするのが気になったので、見学者として参加していた。

「なるほど、若手意識の原因はある種のトラウマか。な、できる限りわかりやすく優しく教えるでしょうか」

「わー、嬉しい! ありがとう、クレアさん!」

「まずは基本の立ち方からやってみようか。その場でリラクセスして立ってみて」

ヴァレリアは言われた通りに、その場で気をつけの姿勢を取る。

「ははっ、肩に力が入り過ぎだよ。もっとリラクセスしていい。あと、ちょっと視線が下がっているね。真っすぐ前を見ると、背筋も伸びるよ」

クレアはヴァレリアの身体を軽く触りつつ、姿勢を矯正していく。

すると、ものの数分でヴァレリアの姿勢は見違えるほど良くなった。

「ほわあ……こ、これが私……?」

鏡に映った自分を見て、ヴァレリアはうっとりとした声を漏らす。

「そうだよ。正しい姿勢は、美しく見える姿勢でもあるんだ。これでおじいさんから怒られななし、美しく見えるし、一石二鳥だろう?」

「うん! なんかこう、気が引き締まった気がする! でも、これ結構お腹の筋肉も使うんだね」

「そうだね。でも筋肉を使えば、お腹も引き締まる。これで一石三鳥だ!」

「おお、すっこ! めっちゃお得じゃん!」

「どうかな? 単純に正しい姿勢をしましょうって言われ

るよりは、かなりやる気に出るんじゃないかな?

冥王くんも、姿勢のいい女の子は好きだろう?」

「ああ、間違いない」

クレアを援護射撃するように、大きく頷いた。

「ふふつ。冥王くんも応援してくれるなら、一石四鳥だね」

「クレアさん、センセー。あたし頑張る! よーし、燃えてきたー!」

こうして数日間に及ぶ姿勢やテールマナー、そして様々な所作の特訓を経て、ついにヴァレリアが里帰りをする当日となった。

「はあ……」

屋下がりの街道には似つかわしくないため息が、穏やかな風に乗って消えていく。

「ため息なんてヴァレリアらしくないね。そんなに気が重いかい?」

「まあねー。やるだけのことやっただと思うけど、おじい



「あ、向かう道すがら、疲れ切ったような声を漏らすヴァレリア。」

「ヴァレリアの様子を見つめていたクレアは、思いついたように声を上げた。」

「じゃあ、無理に行かなくても、いいんじゃないかな？」

「えっ？」

「確かに家族というのは世間からすれば大事なものだろうけど、無理をしてヴァレリアが苦しむのはよくないよ」

「ヴァレリアも呆気にとられたのか、目をぱちぱちとしばたかせる。」

「しかし、すぐにへらっと柔らかい笑みに変わる。」

「心配してくれてありがとう、クレアさん！でも大丈夫だよ。確かにちよつと弱気になってたけど、あれだけ特訓したんだし、きつと大丈夫だよ！」

「俺も大丈夫だと思う。ヴァレリアは真面目に取り組んでいたし、クレアの指導も的確だった」

「少しでもヴァレリアが元気になればと、横から口を挟む。マジで!? センセーのお墨付きなら、もう怖い物ないじゃん！ぱちりキメて、おじいちゃんを驚かせちゃうからねー！」

「ヴァレリアは二カツと八重歯を見せながら笑う。さつきまでのどんよりとした表情が嘘のようだ。」

「ふふつ、そこまで気持ちのいい笑顔を見せてくれるなら心配はなさそくだね。どうやら、私の取り越し苦労だったみたいだ」

「えへへ、心配させちゃってごめんクレアさん！もう大丈夫だから！」

「すっかりいつもの調子を取り戻したヴァレリア。クレアもそれに倣おうとするが、どうも表情が硬い。」

「いつも余裕たっぷりで大抵のことは受け流すのに、今日はどうしたのだろう。」

「なあクレア……」

「ああ、心配かけてすまないね。ちよつと自分の実家を思い出しただけだよ。気にしないでくれ」

「俺の心配を、クレアは手を振って遮る。そういえば、クレアは実家を飛び出して傭兵になり、その後《アイリス》になった。」

果たしてクレアは、《アイリス》になった後、実家と連絡を取っているのだろうか？

「センセー、ぱちりとしてると置いていくよ」

「ん？ああ、すまん」

「少し駆け足で、先を歩いていたヴァレリアとクレアに追いつく。」

「俺は脳裏をよぎった疑問を持って余しながら、街道を歩き続けた。」

「……無沙汰してます。おじいちゃん——おじい様」

「緊張した面持ちで、頭を下げるヴァレリア。その様子をヴァレリアの祖父、リステイがじつと見下ろす。」

「ふむ、多少は口の利き方を覚えたか。これも冥王の教育の賜物か？」

「いえ、俺は特に何も。クレアが全部やってくれたので」

「はじめまして。クレア・フィランドルと申します」

「舞台役者のように恭しく頭を下げるクレア。オーバーな仕草に見えるが、すべての動きに隙がなく、逆に自然な動きにすら感じられる。」

「これはご丁寧に。うちの孫娘がお世話になったようだな。なかなか手がかったのではないかな？」

「いえ、ヴァレリアさんは優秀な学生ですから。彼女の勤勉こそ、賞賛されるべきことかと」

「にわかには信じがたいな。子供のころは、勉強時間のたびに逃げ出していたというのに」

「そもそも、おじいちゃんが教えるのが下手つ過ぎたんだよ」

「何か言ったか？」

「なんでもないです！」

「ジロツとリステイににらまれ、ヴァレリアの背筋が伸びる。」

「ヴァレリアは真剣なのだろうが、どうにもコメディっぽく見えてしまい笑いをかみ殺す。」

「……まあいい。まだ食事の時間まで少しあるから、それまで部屋でゆっくりしているといい。クレア殿は——」

「……はあ、好きにしろ。クレア殿も、それでいいだろうか？」

「はい。お気遣いありがとうございます」

「すっかりいつもの調子に戻ってしまったヴァレリアに、思わずクレアが苦笑いする。」

「リステイも眉をひそめてはいるが、瞳の奥の光は優しい。」

「じゃ、クレアさんいこっか！」

「ヴァレリアはクレアの手を引いて、階段を駆け上らうとする」

「ヴァレリア、家の中で走るな」

「あ……こめんなさい」

「リステイの鋭い視線に冷や汗をかきつつ、右手と右足を同時に出しながら、ゆっくりと階段を上っていく。」

「はあ……すまぬな、冥王。孫娘がなかなか成長せず」

「いえ、ヴァレリアは確実に成長していますよ。俺が保証します」

「そうか。いや、そうでなくては天使や深淵との苛烈な戦いを生き残ればせぬか」

「もちろん戦いにおいてもですが、それ以外においてもですよ」

「そうか……足を引つ張っていないのなら安心だ」

「階段を上っていくヴァレリアを、リステイは優しく見守る。」

「確かに滲む家族愛に、俺の心にも温かいものが満ちていく。」

「食事前だが、もう少し詳しく話さぬか？ヴァレリアが普段どのような生活をしているのかについて」

「ええ、喜んで」

「こうして俺はリステイの自室に招かれて、お茶を楽しむことになった。」

「話題はもちろん、学園でのヴァレリアについてだ。」

「俺が語るどんなエピソードも、リステイは優しい笑顔で聞いている。」



「あー、やつぱり実家のベッドは落ち着く〜！」

「ヴァレリアは部屋につきなり、思いつきり布団の上にダブする。」

しかし天蓋付きの豪華なベッドは彼女の身体をしつかりと支え、ホコリ一つ舞い上がらない。

その様子をクレアが眩しそうに見つめていた。

「あ、クレアさんはその辺の椅子使っているよー。適当に座って」

「……………」

「どったのクレアさん? ぼーっとして」

「あ、ああ……すまない。ちよっと子供のころを思い出してね。私の家にもこのぐらい大きなベッドがあったなって」

「クレアさんも貴族出身だもんね。やっぱあたしの家ぐらい大きかったの?」

「ああ。使用人も多くて、部屋の1つ1つも広くてね。でもその割にはすごく窮屈な生活をしてたのを覚えてるよ」

「そっか……」

「何か気になることでも?」

「あ、うーん。大したことじゃないんだけど……」

ヴァレリアは言葉を探るように口をつぐみ、そしてぐつと身を乗り出した。

「あの、クレアさんって実家を飛び出してきたんだよね? もしかして、うちに連れてきちゃったから、嫌なことを思い出させちゃったかなって……」

「ああ……まあ、多少は思い出したかな。でも、ヴァレリアは悪くないよ」

そう言って目を閉じると、クレアの脳裏に実家での思い出が蘇ってきた。

——実家では様々な教育を受けたが、すべては政略結婚の駒として育成するためだったこと。

——顔も知らない相手との結婚を決められ、家を飛び出したこと。

もちろん当時はいろいろと思うこともあったし、傷つきもした。

「大丈夫、全部もう割り切ったさ。貴族の娘なら、同じような経験をした人はいっぱいいるからね」

ヴァレリアを元気づけようと、クレアは爽やかに言い放つ。

「うーん……そういうことじゃなくて。本当に、クレアさんは大丈夫?」

「ああ。何も問題は起きてないからね。むしろ、藪をつつ

いて蛇を出すようなことはしたくないかな」

「なら……いい、のかなあ……うーん……」

ヴァレリアは言葉を探しながら、うーんと唸り続ける。そして、ゆつくりと胸の内を語り始めた。

「……あたしもさ、実家にいる時はおじいちゃんどあんま仲良くないなって思ってたんだ。何かするたびに怒られるし、自由なんてなかったし……。でも、『アイリス』

になって家から離れたら、家で教えられたことって全部意味があつたって、わかったんだ。だから、おじいちゃんは赦しいけど、優しいし感謝してるの」

自分のことを語り終えたヴァレリアは、じつとクレアを見つめる。

「クレアさんには、そういう思い出ないの? お父さんとかお母さんとの楽しい思い出、何もないの?」

「私は……」

ヴァレリアの純粋な瞳にクレアは言葉を飲み込む。

クレアが何か言おうと口を開こうとしたその時——

「失礼いたします。お食事の用意ができました」

ドアの外から、メイドの声が聞こえる。答えに窮していたクレアには、その声が助け船のようにすら聞こえた。

「ほら、ぐずぐずしている料理が冷めてしまふよ。食堂に向かおう」

「う、うん……」

何か言いたげなヴァレリアだったが、ぐつとその言葉を飲み込んで立ち上がる。

その様子を見たクレアは、こっそりため息をついた。

「ふう……夜風が気持ちいいな」

夕食後、クレアはとつぷりと日が暮れた庭へ散策に出た。厳格なヴァンピール貴族を象徴するように規則正しく整備された大きな庭園。

昼間であれば色鮮やかな木々の葉や咲き誇る花の色に心を躍らせただろうが、肌をひんやりと撫でる夜風のせいでお悲しく感じてしまふ。

あてもなく庭を歩き続けるクレアの思考の大半を占めるのは、昼間ヴァレリアにぶつつけられた質問だ。

「両親への気持ち……ねえ」

クレアにとって両親とは、貴族の生き方を体現したような存在だった。

社交界にも積極的に参加し、社会的地位を維持するために家族を駒のように使う。

信条や道徳よりも伝統や血筋を重んじ、事なかれ主義を貫く。

子供の頃は両親の考え方に反発を覚えたが、今となってはそれが貴族として正しい生き方であったことくらい、クレアも理解している。

「唯一尊敬できたのは、庭の手入れが行き届いてたことぐらいかな」

クレアの記憶にある実家の庭園はここよりも少し小さいが、その分植物の種類は多かった。

維持管理は使用人に任せていたものの、何を植えるから木々の配置まで、決めていたのは全て父親だ。

「庭園での社交パーティーが毎年の恒例行事だったからね。そりゃ気合も入るってものだ」

身内からは庭を大事にするあまり公務に差し支えが出るのではないかと心配されるほどに父親は園芸に凝っていた。

母親はそんな父親の姿に呆れ、そして軽く笑顔をにじませていたのをクレアは思い出す。

「……今思い返せば、子供っぽいところもあったのかな」

苦笑を1つ浮かべたクレアがそろそろ帰ろうと踵を返したとき、唐突に元気な声が投げかけられた。

「あ、クレアさん。こんなところにいたんだ! どうしたの?」

「ん? ああ、ちよっと夜の散歩にね」

ヴァレリアに呼び止められて、クレアは足を止めた。

「そっか。一緒にいてもいい?」

「もちろん」

ヴァレリアはクレアの隣にピッタリと寄り添って、歩幅を合わせて歩きはじめた。

さくさくと地面を踏みしめる足音だけが、静かな夜間に溶けていく。

「そうだ、クレアさん。今日は本当にありがとだね。おじいちゃんも、テールブルーナーがちゃんとできてたつて喜んで

「でた」

「礼には及ばないよ。全部ヴァレリアが努力した結果さ」

「えー、クレアさんの教え方が上手かったからだって。おじいちゃんが教えてたときは全然覚えられなかったもん」

「ははっ、身内相手だと、どうしても厳しくなるからね」
そして、リステイの厳しさには打算はなく、ただ深い愛情があることにクレアは気づいていた。

だからこそ、ヴァレリアは真つすぐ育ったのだろう。

「あ、じゃあお礼にとっておきの場所を教えようあげる！
ついてきてー！」

ヴァレリアはクレアの手を引いて、どンドン庭の奥へ歩を進める。

背の高い垣根の間を縫っていくと、急に視界が開けた。
「じゃーん！ ここがとっておきの場所！」

ヴァレリアが足を止めたのは、屋外に作られた喫茶スペースだった。

地面にはレンガが敷かれていて、白い金属製のテーブルと椅子が月あかりを浴びている。

「ほら、座って座って。大丈夫、綺麗にしてあるから」

「あ、ああ」

ヴァレリアに押し切られるようにクレアは椅子に座る。

屋外に置いてあるにもかかわらず、椅子もテーブルもビカビカだ。

「綺麗だし、雰囲気もいいし。落ち着ける場所だね」

「えへへ。おじいちゃんに言ったら喜ぶと思うよ。ここ、おじいちゃんもお気に入りの場所だから。実家にいたころは、一緒に紅茶を飲んでたりしてたんだー」

「ふふっ、昔からおじいさんと仲が良かったんだね」

「ここに居る時は、おじいちゃんがいっつもより優しくかったんだ。周りの花からリラックスさせる香りでも出てるのかも」

「確かに、こんな綺麗なお店で小言なんて言う気にならないかもね」

クレアは目を閉じて、身体いっぱい周囲の空気を吸い込む。

「……あれ？ この香り、どこかで……」

クレアは香りと共に脳裏に浮かび上がってきた記憶を掴もうとするが、霧がかかったように上手くいかない。

「どつたの、クレアさん？」

「いや、嗅ぎなれた香りがしてね。甘い香りなんだけど……」

「うーん……ああ、これじゃない？」

ヴァレリアが指差した先で赤く咲き誇る花に、クレアは見覚えがあった。

「ああ……サルビアか」

「そうそう！ ってクレアさん知ってたんだ」

「いや、名前は今思い出したんだ……昔、よく見ていたからね」

クレアのお顔が好きで、夏から秋には庭を赤い絨毯のように染めていた。

それを自慢する父の表情は、とても誇らしげだったことを覚えていた。

「ふふっ……あれだけ私に興味のなさそうだった父が、花のことになる？ 子供のように私に自慢しにきていたっけ」

「どうしたの？ 何か面白いことあった？」

「いや、ちよつと思ひ出し笑いをね」

記憶の海に沈んでいた、幼いころの思い出。

ゆつくりと水面に浮かんできたそれは、花の世話の手伝いをするクレアと、それを優しく見守る両親だった。

「でも、よかった。やっとクレアさんがいつものクレアさんに戻ってくれて」

「おいおい、私はいつも通りだったろう？」

「えーそうかなあ？ やつと普通に笑ってくれたような……くちゅんっ！」

「ほら、風邪をひくといけないからそろそろ戻るう」

「はい」

戻りがけに、クレアは夜空を見上げる。

雲のない星空には、満天の星がきらめいていた。

「あー、やつと終わったあ〜〜〜！」

翌朝、ヴァレリアの実家を出て、森をしばらく歩いていく頃、

先頭を歩くヴァレリアが歩きながら大きく伸びをし、大きな声を出す。

「これでしばらくおじいちゃんから、いろいろ聞かれない

で済むかな。付き合ってくれてありがと、センセー」

「気にするな。それに、お土産もたくさんもらったし」

俺はリステイから手渡された袋を揺らす。

中にはヴァンピールの里でしか採れない貴重な植物が入っている。ナジヤやポリンあたりに渡したらきつと喜ばれるだろう。

「そうだ、ヴァレリア。昨日の昼に聞かれた質問の答えだけ」

「えつと、家族との思い出のこと？」

「そうさ。昨日、少し考えてみたんだけど……」

そこでクレアは言葉を切って、空を見上げる。

「少しくらいは、いい思い出もあったと思うよ」

陽の光を受けつつ、クレアは鮮やかに微笑む。

その表情を見て、屋敷に咲き誇っていた真つ赤な花を思い出したのは偶然ではないだろう。

サルビア——花言葉は家族愛。

完





アナスチガル

緑の家族を統べし女王

CV 手塚まき

ナジャ

贖罪の非常勤講師

CV 北風響子

あやしいシステリア!

~ 少女のつむぐ夢の秘跡 ~

新アイリス登場!

★好評稼働中★

あいミス4コマ単行本& LINEスタンプ好評発売中!!

あいミス公式サイトにて大好評連載中の『あいミス4コマ漫画』の単行本が電撃コミックスEXより好評発売中です。めざしさんによる、アイリスたちの可愛くてちょっぴり毒がある4コマをたっぷりお届け致します。さらに、あいミスがもっとわかる描きおろし

コミックや4コマも収録。アイリスたちの日常をぜひお楽しみください。さらに、4コマ漫画の印象的なシーンを収録した、LINEスタンプも発売中です。普段の会話に彩りを与える、とても可愛らしく使いやすい内容です。ぜひご利用ください!



スタンプのご購入方法

LINE上で「あいりすミステリア!」と検索頂くか、左のQRコードからアクセスしてください。

あいりすミステリア! スタンプ 50コイン (120円)

※価格は現在のものです。



4コマ単行本

発売日!!



あいミスラジオ好評配信中!!

コト役の藤咲ウサさんとプリシラ役の猫村ゆきさんによるラジオ番組が大好評配信中です!

毎週木曜日にあいミス最新情報のご紹介をはじめ、皆さまから頂い

たお便りコメントを取り上げながら賑やかにお届けしています。

Youtubeの「あいミスRADIO!」公式チャンネルよりお楽しみ頂けますので、ぜひご視聴ください!

ラジオの視聴方法

Youtubeの「あいミスRADIO!」公式チャンネルより、お楽しみ頂けます。「あいミスRADIO!」で検索頂くか、右のQRコードからアクセスしてください。



タイトル あいりすミステリア! ~少女のつむぐ夢の秘跡~

プラットフォーム PCブラウザ (DMM GAMESよりログイン) / AndroidOS / iOS

キャラクターデザイン・原画 ベっかんこう / 夏野イオ **シナリオ** 榊原拓 / 内田ヒロユキ / 安西秀明 / 加賀宮考一

シナリオ協力 瀬尾順 / 砥石大樹 / 御厨みくり / 保住圭 / かずきふみ / 8 / 姫ノ木あく **音楽** ActivePlanets

CG着彩 ベペル / ひろた / 巻道 / 弥弛 他 **背景美術** ベペル **想飾イラスト** 脳みそホエホエ



スタッフ対談

べっかんこう×榊原拓

#54

2020.4.3 17:05 開発室にて

榊原拓(以下「榊」) さあ、今回も対談の時間がやってまいりました！ それにしても5月のコミケが中止になってしまったのは残念ですね。

べっかんこう(以下「べ」) でも仕方ないですよ……

榊 ですね。僕らは予定していたグッズを作って通販して、あとは変わらずゲームを作り続けましょう。

べ 外出できない分、ゲームで少しでも楽しんでもらえるといいですね。

榊 というわけで、ついに発表になりました。「あいミス」にて『夜明け前より瑠璃色な』コラボイベント開催決定です！

べ ばんばかばーん！ 前から過去作とのコラボをという声はいただいていたのですが、ようやく実現しました。夜明けなもう15周年ですって。

榊 時が経つのは早いです。シナリオでは、達哉がフィーナと結婚できるまで8年とか「長いなあ」とか思ってたものですが。

べ まだ『夜明け前より瑠璃色な』が好きでいてくれるユーザーさんがいらっしゃるの、作り手として嬉しい限りです。ありがとうございます。

榊 先日やったコラボのキャンバスアート、「夜明け前より瑠璃色な」のも結構お買い上げいただいたそうですよ。そう言えば、コラボへ行きましたね。

べ 全メニュー制覇しました！ ばにーに、美味しかったですね。薬膳ラーメンも。

榊 夜明けコラボのカクテルは綺麗でしたし、黒バラレモネードはマドラーが黒バラで洒落てました。

べ どれも美味しかったです。コミュニケーションノートにもたくさん描き込みがあって。皆さん楽しんでいただけたようで良かったですね。またできるといいなあ。

榊 ですねえ。期待しましょう。そしてつい先日『あいミス』4コマの単行本が出ました！

べ 改めて初期の頃からの4コマをまとめ

て読むと、徐々にキャラの掘り込みも深くなってきてて最高です。本にまとまるくらい描いていただいているんですもんね。

榊 描き下ろしも良かったですね。後書きマンガも大好きです。

べ 4コマで髪型いじってもらったり、オリジナル衣装着せてもらったりしているのを見て、こちらも刺激を受けています。シャロンのツインテとかラディスのお団子とか4コマからの逆輸入だったり。

榊 あ、そうだったんですね。各キャラクターのツボというか、そう！ そこが可愛いよね！ って部分が的確に漫画になっ

てるので、勘どころを掴んでいただいているなあ。ありがたい話です。

べ ですね。これからも楽しみにしています。そして待望のLINEスタンプの第2弾が!! 出てるはず？

榊 この対談の時点ではまだなんですが、この小冊子が出る頃にはもうリリースされている予定です。

べ あDIO～ｽｯが判らない人は『あいミスラジオ』を聴いてね！

榊 今回はスライムさんも登場!?

べ どれも可愛いので早く使いたいなあ。ぜひ皆さんも使ってみてください！



* あとがき

Postscript

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。

3月の頭にはナジャ、そして4月末には、
新しい《アイリス》としてアナスチガルが加入することとなりました。
特にナジャはかなり強力な敵として登場してから
仲間になるという展開でしたが、
プレイヤーの皆様におおむね受け入れていただけたようで、
スタッフ一同ホッとしています。

そして既に発表されております通り、
『あいらすミスティリア!』で『夜明け前より瑠璃色な』
コラボイベントが開催されることとなりました。
大変多くのご要望をいただけてきたという幸せな状況の中、
ついに実現できたことを大変嬉しく思っています。
これを機に、より一層多くの方に『あいます』を
プレイしていただければ幸いです。

私たち開発スタッフ自身も楽しめるゲームとなるよう、
今後も様々な企画や展開を検討しておりますので、
引き続きご期待いただければと思います。

2020年5月 オーガスト/ARIAスタッフ一同



* AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2020 SPRING

企画・制作



<https://august-soft.com/>



<https://aria-soft.com/>

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS等に転載していただくことは問題ございません。*全ページを複製配布することをご遠慮下さい。



AUGUST OFFICIAL HAND BOOK
2020 SPRING

